

インストラクショナル・デザインの視点からの CA 日本語教科書分析  
—台湾 C 航空会社の日本語教科書を中心に—  
Analysis of Japanese materials for Cabin Attendant based on  
Instructional Design : A Case study of Taiwan C Airlines

羅 永祥  
武庫川女子大学博士課程

要旨

各国の航空会社は、CA<sup>1</sup>が日本語で機内業務という特定目的を遂行できるよう、機内のあらゆる場面に関するやりとりの日本語訓練コースを提供している。訓練コースで用いられる日本語教科書は市販されておらず、多くは企業が社内資料として編纂しているが、それら教科書の学習目標、会話、単語、文型などの項目はどのように構成されているのだろうか。本研究はインストラクショナル・デザイン (ID) 理論を援用し、その視点から台湾 C 航空会社の日本語教科書『日本語の学習』を事例に教科書分析を行った。結果では、当該教科書は、①場面トピックで構成され、「会話」「単語」「重要表現」の項目があるが、配置は均等ではない。②単語レベルは N5 から級外まで広範囲の単語が含まれている。③文型表現は「いかがですか」「～お～ください」の出現頻度が多く、場面に従ってランダムな配置という特徴が現れている。④発話機能は「尋ねる」「返事」「声かけ」が多く配置され、場面の業務状況によって「勧誘」「説明」「依頼」の機能も見られる。

また、分析結果を踏まえ、インストラクショナル・デザイン (ID) の観点に沿って、CA が働きながら独自 (独学) に継続的に学ぶという「自律学習」支援教科書を開発するための提案をする。

**キーワード:**インストラクショナル・デザイン (ID)、キャビンアテンダント (CA)、  
専門日本語 (JSP)、教科書分析

---

<sup>1</sup> CA とは客室乗務員 (Cabin Attendant) という英語の略称である。

# インストラクショナル・デザインの視点からの CA 日本語教科書分析 —台湾 C 航空会社の日本語教科書を中心に—

羅 永祥

武庫川女子大学博士課程

## 1. はじめに

各国の航空会社では、乗客に優れたホスピタリティーを提供し、飛行安全の確保等の業務を遂行するため、キャビンアテンダント（以下「CA」と略す）に対して、「機材」、「サービス業務」、「緊急脱出準備」などの航空知識やスキル等を含む地上訓練コースが行われている。外国人乗客との円滑な対応ができるよう、英語、日本語など外国語でのやりとりの言語訓練もコースの一環である。台湾 C 航空会社（以下「C社」と略す）の場合、日本語訓練コースは、新人 CA 対象とする 300 時間ほどの地上訓練のうち、わずか 12 時間を占めるのみである。コース用の教科書『日本語の学習』は会社内部で編纂したテキストで外部には出版されていない。内容は様々な機内業務場面でのやりとりを会話形式にして編纂されている。また、訓練コースは新人 CA に対して行われるのみで、勤務を開始した後の現役 CA への日本語研修は提供していない。その結果、訓練を受けたにもかかわらず、機内業務では日英交じりの言語使用にとどまることになる。また教科書にも実際の使用場面がすべて含まれるわけではないなどの問題が指摘されている（羅 2017）。

一方、台湾では航空人材ニーズに応じ複数の大学で航空日本語科目を開設している。しかし専門日本語科目とはいえ初級レベルの授業内容にとどまるのが実情である（羅 2021）。つまり、台湾では、大学の航空日本語人材から航空会社の新人 CA までの日本語人材育成、さらに働きながら自律的、継続的に学ぶための学習支援が急務となっている。

## 2. 研究課題

CA のための日本語教育は、JSP（Japanese for Specific Purposes）、すなわち専門日本語教育の一環と捉えられる。大坪は「専門日本語教育研究の目的は、現実の社会の中で日本語を使って、ある目的を達成しようとしている人々を支援する効果的な方法の開発である。」という（大坪 1991）。この視点に立つと、CA の業務の質を向上するためには、効果的、効率的、さらに魅力的な学習支援が求められることになる。とりわけ教科書は、一般的な言語学習と同様に、CA 日本語人材育成でも重要な媒介となるもので、教師には授業流れの基準になり、学習者には言語技能習得のみならず、学習意欲を促し継続的学習へと導く効果にも影響を与える。

そこで本稿では、学習理論であるインストラクショナル・デザイン (ID) の視点から「C社」のコース用教科書『日本語の学習』を対象に資、その構成や内容の検証を行う。目的は、現行教科書の改善、専門日本語教育としての CA の日本語研修や教材開発の方向性を提案することである。以下に本研究の課題を挙げる。

- 1) 『日本語の学習』分析 (①構成内容、②語彙レベル、③会話の発話機能、④文型表現と一般的な日本語教科書『みんなの日本語』<sup>2</sup>との対照)
- 2) インストラクショナル・デザイン (ID) 理論に基づいた分析結果の検討
- 3) CA のための日本語教科書開発に向けた提案

### 3. 先行研究

#### 3.1 専門外国語教科書分析に関する研究

日本語教科書分析に関して加住は、「基本情報」、「教科書構成」、「学習項目」、「言語要素」などの項目を分析対象とするとしている (加住 2016)。これに対して李は、専門言語教科書の分析では、「教科書目標」、「教科書内容」、「教科書内容構成」、「内容提示」の項目だけでなく、「学習者の認知や心理への配慮」、さらに「自律学習目標の構成」などの項目を満たすことを求めるべきだとしている (李 2015)。ここには教科書が学習者の認知とつながって構成されるものであるという視点があり、学習者の背景を視野に入れ、自律学習に向けた教科書の内容構成が必要であるという見解が認められる。

CA に対する外国語教科書研究は、管見の限り 4 本のみで、中国語と日本語の学習について、それぞれ 2 本ずつある。まず、張雅筑は外国人 CA の中国語教科書を開発するため、免税品販売場面を中心にニーズ調査している (張雅筑 2017)。それによると、機内中国語は会話内容の重複性が高く、語彙、慣用表現が多いという特徴を示しており、教科書編集をする際には CA のレベルに配慮して「易から難へ」のように配置し、それを循環させる螺旋型シラバス構築を提案している。次いで、張玉佳は外国人 CA のための中国語教科書開発および実践研究をし、そこに「予備—実施—教科書発展—授業評価」段階があることを指摘した。「予備」段階で教科書編集をする際は、「実用性」「趣味性」、「科学性」<sup>3</sup>「場面性」等の原則だけでなく、課と課の繋がりにも留意すべきだと論じている (張玉佳 2017)。

<sup>2</sup> 『みんなの日本語』の文型表現は「日本語 NET」という日本語教案や授業、文法解説サイトを参照して取り上げる。

<sup>3</sup> 科学性とは教科書内容、目標、言語技能、知識、態度、ストラテジー、異文化理解等の項目は体系的、系統的の繋がる配慮ことである (崔永華 2012)。

日本語教科書に関する研究では、赤城が CA の職業目的の日本語教科書の学習内容優先順序に関する調査を行っている。そこでは、CA 業務は日本語の要不要に分けられ、それはさらにルーティーンとサブルーティン業務に再分類されていることから、ルーティーンを優先的に教科書に導入すべきだと述べている（赤城 2011）。また、筆者は「既存教科書の実用性」の視点から、既存教科書と実際の日本語使用場面とがどの程度一致するかを調査し、「既存教科書にはすべて現場の日本語使用場面が反映されているわけではない」とした（羅 2017 前掲）。

以上のように、先行研究では学習者のニーズ、業務上のやりとりの優先順位の導入などへの提案はあるが、既存教科書の語彙、文法表現、練習活動などの内容構成についてはあまり述べられていない。下節では事例として一つの教科書を取りあげ、内容構成を詳細に検証することにする。

### 3.2 インストラクショナル・デザイン (ID) 理論と教科書開発

インストラクショナル・デザイン (ID) とは、教育活動の効果・効率・魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野またはそれらを活用して学習支援環境を実現するプロセスを指す学習理論である。その中の一つに、教育活動をいかに効果・効率・さらに魅力的な学習支援方法にするかを目的とした「ガニエの 9 教授事象」<sup>4</sup>が挙げられる。これは学習構成と授業の流れとを繋いで組み立てる学習支援プロセスで、【導入—展開—まとめ】の授業プロセスと、それぞれの事象を各段階に配置することで効果的、効率的な学習や支援が実現できるとする（鈴木 2005）。

ところで、インストラクショナル・デザイン (ID) 理論は授業での学習支援だけでなく、教科書開発への応用にも見られる。たとえば日本語教育における教材開発では、インストラクショナル・デザイン (ID) プロセスに基づき、体系的な教科書設計・開発の必要性が指摘されている（島田・柴原 2008）、またその評価・検証にも用いられている（平山・高橋 2013）。

インストラクショナル・デザイン (ID) における【Plan-Do-See】プロセスを詳細に見ていくと、まず【Plan】段階には学習準備状況を「入口」、どこまで学ぶかという学習目標を「出口」とし、教科書構造の内容を分析し、授業内容を構成する。

---

<sup>4</sup> ガニエの 9 教授事象は「学習者の注意を喚起する」、「授業目標を知らせる」、「前提条件を思い出せる」、「新しい事項を提示する」、「学習指針を与える」、「練習機会を作る」、「フィードバックを与える」、「学習の成果を評価する」、「保持と転移を高め」の 9 事象。

次に【Do】段階では【Plan】に基づいて教科書を開発する。開発した教科書を使用した状況を評価して「教科書を改善する」ことが【See】の段階になり、各段階を循環しながら教科書を改善することができる。教科書開発では「ガニエの9教授事象」が内容構成の基準となっているが、これについて鈴木は「ガニエの9教授事象は人間がどうやって新しい知識や技能を習得するのかを説明する学習モデルを反映した形で、教科書を組み立て、説明の方法を工夫し、作業を課していくと、効果のある教科書を作れるかと考えました。」と述べている(鈴木 2002)。言い換えれば、「ガニエの9教授事象」は学習者が知識を習得するプロセスによって形成されるモデルであり、教科書分析においても、それが教授事象に従って組み立てられているか、授業の流れが効果的に学習支援できるよう構成されているか、という視点に立った検証を可能するものであると言えよう。

このようなインストラクショナル・デザイン (ID) の枠組みに照らすと、「C社」の日本語研修コース用の教科書検証をすることは【See】の段階に当たる。次章では「C社」の教科書『日本語の学習』を対象にインストラクショナル・デザイン (ID) の視点を援用して、その構成内容を明らかにする。

#### 4. 調査方法

研究方法では文献調査法と対照調査法を用い、「語彙」「文型表現」「発話機能」の三つに注目して分析した。発話機能を加えたのは、会話ではその目的を理解し言語運用することが重要だと考えられるからで、それを「発話機能」として各トピックに表現された会話内容の分析を行う。手順は以下のとおりである。

- 1) 語彙：学習する語彙を分析するため、『日本語の学習』の構成項目を検視し、語彙を抽出する。それを日本語読解学習支援ツール「リーディング・チュウ太」<sup>5</sup>を用いて語彙レベルを判定する。その際、重複する語彙や判別困難な文字などのエラーを検査し修正する作業を繰り返し、レベル判定をする。
- 2) 文型表現：『日本語の学習』の会話から文型表現を抽出し、『みんなの日本語』の文型表現を基準として、両教科書の文型表現の提出順位や用例数などの相違を比較対照する。
- 3) 発話機能<sup>6</sup>：トピックに表現された会話での発話機能を抽出して分析する。

---

<sup>5</sup> 「リーディング・チュウ太」ツールは、東京国際大学教授、川村よし子氏によって開発された日本語学習支援システムである。日日、日英、日蘭などの辞書ツールに対応するほかに、語彙、漢字、文型チェッカーや形態素解析のツールも含まれる。難易度レベルについては日本語能力試験のレベル N1～N5 を用いている。

## 5. 調査結果

### 5.1 教科書の全体構成

『日本語の学習』には、11のトピック場面があり、それぞれ「会話」「単語」「重要表現」の項目で構成され、付録の項目は「数字の言い方」がまとめられている。しかし、インストラクショナル・デザイン（ID）にある「学習目標」「練習活動」などは当該教科書に配置されていない。この点は留意しなければならない。

表1を見ると、「搭乗」「座席案内」「離陸」などの11機内業務に関するトピックが設定されており、トピックごとに0～3つの会話<sup>7</sup>、対応する単語、重要表現が配置されている。「単語」は全体で166語あり、トピックごとに0～36語が配置されている。各課新出単語には、会話に出現する単語だけではなく、関連する単語も載っている。たとえば、会話で「トイレ」が新出単語として設定されているが、そのほかに「化粧室」「お手洗い」「便所」などの関連単語も配置されていることなどである。一方、「重要表現」は全体として37表現あり、「搭乗」「座席」「離陸前」「安全検査」「機内サービス」「免税品」「着陸」のトピックに3～8の表現が配置されている。しかし、「入国書類」「異常」「案内」「アナウンス」には「重要表現」は配置されておらず、各課の構成要素が均等に配置されているとは言えない。

表1：『日本語の学習』構成一覧表

項目	構成内容											計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
課	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
トピック	搭乗	座席案内	離陸	安全検査	機内サービス	免税品	入国書類	異常	着陸	案内	アナウンス	11
会話数	3	2	3	0	3	2	0	1	0	3	2	17
単語数	22	12	25	0	30	25	6	0	10	36	0	166
割合 (%)	13	7.2	15	0	18	15	3.6	0	6	22	0	100
重要表現	8	6	6	5	3	3	0	0	5	0	0	37
割合 (%)	22	16.2	16	14	8	8	0	0	14	0	0	100
付録	数字の言い方											

<sup>6</sup> 山岡によると、発話機能とは話者がある発話条件を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念したものであると定義している（山岡 2008）。

<sup>7</sup> 会話数はトピック場面ごとに完結する会話のかたまりを1単位として測定する数字である。

また、「重要表現」には慣用表現と文型表現が共存している。文型表現は「～いかがですか」「～をください」「～をお願いします」のように、目的語が設定されている表現である。たとえば「シートベルトをお締めください」では目的語（ここではシートベルト）が設定されており、いわゆる代入練習の対象になる。一方、慣用表現は「挨拶」「別れ」「お詫び」などのフレーズで、たとえば、「おはようございます」「よいご旅行を」などがそれにあたる。これら慣用表現はいわば決まり文句であるが、ここには「特定の場面で必要な特定の表現を CA に暗記させる」という教科書編集者の意図が読み取れよう。

分析結果から、教科書構成はトピック場面を中心に「会話」「単語」「重要表現」で構成されているが、「学習目標」「練習活動」といった項目は配置されていない。また「会話」「単語」「重要表現」項目もすべてのトピックに設置されるわけではなく構成には偏りがある。

## 5.2 単語レベル判定

表 2 は会話と単語リストを「リーディング・チュウ太」でレベル判定した結果である。全体で 231 語があり、難易度は「普通（初級程度）」レベルに判定される。レベル別では、N5 レベルから級外までの単語が含まれ、N5 レベルの単語が 124 個（53.70%）で第 1 位を占めている。第 2 位は N2・N3 レベルで 41 個（17.70%の単語）、第 3 位は級外のレベルで 33 単語（14.30%）となっており、N4 と N1 レベルは第 4 位と第 5 位となっている。当該教科書には幅広いレベルの単語が含まれているが、初級レベルが多数を占めており、級外レベルは外来語や地名、専門用語が多く占めている。たとえば、「シートベルト」「東京」「洋食」などは級外レベルと判定するが、機内業務遂行では使用頻度が高い。結論として『日本語の学習』は一般的な教科書とは異なり、習得レベルよりも業務場面に配慮して各課に単語を配置しており、その点では専門日本語の特徴を示している。

表 2：『日本語の学習』の単語レベル一覧表

レベル	級外	N1	N2・N3	N4	N5	合計
単語数	33	8	41	25	124	231
割合 (%)	14.30%	3.50%	17.70%	10.80%	53.70%	100.00%

### 5.3 文型表現

『日本語の学習』では、33の文型表現がリストアップされているが、紙幅の制限でその中の一部、出現頻度が2回以上の17文型を取り上げ、表3にまとめた。

表3：『日本語の学習』と『みんな日本語』文型表現対照表

文型表現	『みんなの日本語』での初出課	『日本語の学習』のトピック場面での出現	出現頻度
お・ご~ください	第49課	案内、安全検査、異常	10回
いかがですか	課外	離陸前、免税品	8回
~をお願いします	課外	座席、離陸前、機内サービス	5回
~は~です(か)	第1課	搭乗、案内、座席	4回
どこ/こちら/そちら/ あちら/どちら	第3課	搭乗、座席	4回
お~ですか(か)	課外	搭乗、座席、機内サービス、 免税品	4回
~をください	第3課	離陸前、機内サービス	3回
~でございます	第50課	離陸前、機内サービス	3回
~がございます	課外	離陸前、免税品	3回
~いただきますか	課外	搭乗、座席	3回
~円(いくら)ですか	第3課	免税品	2回
~時~分です	第4課	案内	2回
~はあります(か)	第9課	離陸前、免税品	2回
~くらいです(か)	第11課	案内	2回
~と~どちらが~	第12課	機内サービス	2回
お・ご~します	第50課	離陸前、免税品	2回
お・ご~してよろしいですか	課外	座席、離陸前	2回

出現頻度では「お~ください」「~いかがですか」「~をお願いします」が上位3位で、それぞれ10回、8回、5回の出現となっている。「~は~です(か)」「どこ/こちら/そちら/あちら」「お~ですか」などの7文型表現は少なくとも3回出現している。

「~円(いくら)ですか」「~と~どちらが~」「お~してよろしいですか」などの7文型表現は2回だけの出現であるが、トピック場面によっては必須表現である。「~と~どちらが~」は「機内サービス」場面で乗客に物の選択を尋ねる際に不可欠であることがその例である、文型表現の出現頻度が高くなると場面の共通性も高くなるが、頻度が低くても特定場面で必須表現であると言える。



ところで、一般的な日本語学習教科書として汎用されている『みんなの日本語』の文型表現と対照してみると、『日本語の学習』の 33 の文型表現の学習順序は、必ずしも『みんなの日本語』のような積み上げ式に設定されているわけではない。たとえば「搭乗」場面では『みんなの日本語』の第 1, 3, 50 課や課外の文型表現が配置されている。つまり、『日本語の学習』では各場面の業務を重視して文型表現がランダムに配置されているため、文型の難易度も分散している。これも専門日本語教科書の特徴といえる。

#### 5.4 発話機能

本節では、会話の発話機能は CA と乗客の会話内容に分け、それぞれの発話機能を抽出して「CA の発話機能 (CA は話者)」、「乗客の発話機能 (CA は聴者)」に再分類して分析する (表 4)。『日本語の学習』は、主に CA が機内業務を遂行するために設定される教科書であり、CA が発話者として「尋ねる」「返事」「声かけ」をする機能だけでなく、場面状況によって「勧誘」「説明」「依頼」などやり取りを伴う発話機能もある。「CA の発話機能」は CA が発話すること、つまり話すための会話内容で、「乗客の発話機能」は乗客が話し、それに対して CA が受け答えをする、という設定である。つまり、言語技能の面では、CA は話者として「話す」技能だけでなく、聴者として乗客からの返事や尋ねられた内容を理解するための「聞く」技能も求められることになる。

分析結果では、「CA の発話機能 (CA は話者)」には「尋ねる」「返事」「説明」などの 9 つの発話機能があり、「返事」は 20 回 (33%) の出現頻度で第 1 位、「尋ねる」と「声をかけ」は第 2 位と第 3 位で、それぞれ 12 (20%) と 11 (28%) の出現回数である。「説明」は上位 3 位の機能より少なく、7 回 (11%) である。「勧誘」「依頼」「許可」「確認」「勧告」は、いずれも 5 回以下の出現頻度となっている。発話機能の配置場面を見ると、トピック場面に共通する発話機能もあれば、場面独自の機能もある。たとえば「座席」と「免税品」場面を見ると、「尋ねる」と「返事」の発話機能が共通してあるものの、「確認」と「勧告」機能は「座席」場面にしか配置されていない。一方、「乗客の発話機能 (CA は聴者)」には表 4 のように「尋ねる」「返事」「声かけ」の 3 つの発話機能があり、「返事」は「尋ねる」より高く、13 回 (56%)、「尋ねる」は 9 回 (39%) の出現頻度を示している。「声かけ」は 1 回 (4.3%) だけの出現となっている。

表 4：『日本語の学習』発話機能出現頻度一覧表

CA の発話機能 (CA は話者)			乗客の発話機能 (CA は聴者)		
機能	トピック場面 (出現頻度)	出現 割合	機能	トピック場面 (出現頻度)	出現 割合
返事	座席 (3) 免税品 (3) 時間 (3) 天気 (1) その他 (10)	20(33%)	返事	座席 (1) 新聞 (1) 飲み物 (3) 食事 (1) 免税品 (3) その他 (4)	13(56%)
尋ねる	座席 (1) 新聞 (2) 飲み物 (4) 免税品 (3)	12(20%)	尋ねる	座席 (1) 新聞 (2) 免税品 (3) 時間 (2) 天気 (1)	9(39%)
声かけ	その他 (11)	11(18%)	声かけ	その他 (1)	1(4%)
説明	新聞 (2) 飲み物 (1) 免税品 (3) その他 (1)	7(11%)	/		
依頼	荷物 (1) 飲み物 (1) 食事 (1)	3(5%)			
許可	荷物 (1) 食事 (1)	2(3%)			
勧誘	その他 (2)	2(3%)			
確認	座席 (1) 荷物 (1)	2(3%)			
勧告	座席 (1)	1(1%)			

## 5.5 まとめ

『日本語の学習』の分析結果を以下にまとめて述べる。

- 1) 場面トピックで構成され、それぞれに「会話」「単語」「重要表現」項目を配置しているが、全課に全項目が含まれるわけではない。
- 2) 単語の難易度を判定すると初級中心レベルであるが、N5 から級外までのレベルの幅広い単語が含まれている。
- 3) 文型表現では 33 個の文型表現があり、「いかがですか」「～お～ください」の文型表現の出現頻度が多くを占めている。『みんなの日本語』と対照すると、文型表現の学習順序は積み上げ式ではなく、場面を優先しランダムに配置する特徴が現れている。
- 4) 発話機能から見ると「CA の発話機能」と「乗客の発話機能」場面があり、「尋ねる」「返事」「声かけ」機能は両者に配置されているが、「勧誘」「説明」「依頼」の機能は CA の業務場面状況にのみに設定されている。

以上の分析結果から見ると、『日本語の学習』は専門日本語教科書として単語レベル、文型表現などの構成が一般的な日本語教科書とは異なり、「機内場面で業務の遂行」という特定目的を達成するため編集されていることが確認できる。

## 6. 考察と提案

### 6.1 教科書構成内容

『日本語の学習』は「会話」「単語」「重要表現」の項目で構成されているが、「ガニエの9教授事象」に照らすと、「新しい学習項目を提供する」事象の項目しか見られず、「学習目標」「文法表現」「練習活動」「文化知識」等の視点から「学習者の注意を引く」「目標を知らせる」「練習機会を提供する」「学習の成果を評価する」の事象項目はほとんど見られない。つまり、『日本語の学習』の構成に「会話」「単語」の項目はあるが、「練習活動」などの項目がないことで、効果的、効率的な学習を提供するのは困難だと推測できる。

### 6.2 教科書内容の段階性

インストラクショナル・デザイン (ID) の観点から、効果的・効率的な手法で教育活動を行うということについて、稲垣らは「課題分析」は授業で教えるべき内容を構造化して、課題分析図を作成する作業であり、内容はどんな順で導入すればよいかが見えてくる」と述べている (稲垣・鈴木 2011)。これは、教える内容は課題分析を通じて学習順序を意識して導入するという一方で、CA の日本語訓練では限られた時間で機内業務に関する日本語能力を身につけなければならない、そのためには教科書内容の配置が優先課題になる。以下、「段階性」について提案を述べる。

- 1) 場面の段階性：「搭乗」「機内サービス」「免税品」の場面で日本語を使用する頻度が高くなっている。これらは CA のいわゆるメイン業務場面であり、限られた時間の研修では優先的に導入するべきであろう。
- 2) 単語の段階性：限られた時間で単語の学習順序を再検討すべきである。たとえば、日本語学習経験がゼロレベルの CA には、「トイレ」と「お手洗い」、「ビーフ」と「牛肉」など、外来語を活用できる単語は発音をローマ字で導入する。その後段階的に語彙を広げることで効果的な学習につながる。
- 3) 文型表現の段階性：特定場面での業務会話内容に従って文型表現が決まっているのが特徴である。表 3 を見ると「お～ください」と「～いかがですか」と「～をお願いします」「～は～です (か)」「どこ/こちら/そちら/あちら」「お～ですか」などの出現頻度が高い文型表現を優先順位に導入すれば効率的な授業になるだろう。

『日本語の学習』の改善策として、場面、単語、文型などの項目を段階的な学習順序という視点から再検討することが必要である。さらに、限られた時間で効率的、効果的、魅力的な授業を行うにはどうすべきか。下節にインストラクショナル・デザイン（ID）の視点から「ガニエの9教授事象」に基づき教科書試案を提示する。

### 6.3 「ガニエの9教授事象」に基づいた教科書試案

ここまで見てきたように、『日本語の学習』は「機内場面での業務」に特化した専門日本語教科書の特徴を示しているが、構成内容は【導入】段階に留まっている項目がほとんどである。そこで、『日本語の学習』のトピック場面から一つ取り上げ、インストラクショナル・デザイン（ID）理論にあるゴールを目標とし、「ガニエの9教授事象」に基づいて効果的・効率的・魅力的な学習支援視点になるよう、教科書や授業試案を提案する。その際、「トピック」「単語」「文型表現」を段階化して学習内容を配置する。事例としたのは「機内サービス」場面である（表5）。

- 1) 【導入】段階では「機内食」に関するイラスト、写真、ビデオなど素材や項目を配置する。授業では、教師はそれらの素材を利用して、学習者に機内食サービス状況のリアリティーをもたらし、ディスカッション、Q&Aなどの方法によって学習動機を喚起し、学習目標を確認し、そのうえで、前回授業の復習等を行う。独学の場合、教科書として配置した素材を通じて授業内容や目標の注意を喚起することも可能である。
- 2) 【展開】段階は授業の核心内容であり、主に機内食に関する単語と文型表現を学習し練習することを項目とし、教科書での対応項目は「会話」「単語」「文型表現」「練習活動」、さらに「ディスカッション」項目を置く。この中で、「練習活動」は言語技能を習得するため、「穴埋め」「聴解」「ロールプレイ」などの活動を配置し評価する。活動を通して、教師からの訂正や知識のフィードバックを受けることができる。独学の場合は、学習者は繰り返し練習することで自分の盲点を発見し、習得効果も得られる。
- 3) 【まとめ】段階では授業の効果を検視し、学習意欲を保持し続けるように、教科書には「評価」「応用練習」「文化知識」などの項目を設ける。「評価」については、授業の場合、練習活動を通して教師、個人、さらにグループからの評価方法が適用される。独学の場合は、アンケートや学習チェックリストなどの方法を配置することも可能である。

表 5：「機内サービス」トピック場面の試案

教授手順	「ガニエの 9 教授事象」項目	授業内容	教科書項目の提案（試案）
導入	①学習者の注意の引き	食事、飲み物に関する内容を通して、学習者の経験や注意を引く。	イラスト、写真、ビデオのディスカッション
	②授業目標の知らせ	1. 飲み物などの片仮名を読んだり話したりすることができる。 2. 飲み物、食事の尋ねることができる。	学習目標
	③既習項目の復習	「失礼します」、「いかがですか」「どうぞ、ごゆっくり」の復習	前回授業の復習
展開	④新しい学習項目の提供	1. 食事、飲み物などの単語の音声データを聞かせる。 2. 「～と～どちらがよろしいですか」の表現を提示し、例を提示する	会話、単語、文型表現
	⑤学習方法の提供	1. 外来語の発音と英語の相違や日本語の長音、促音などの知識の提示 2. 表現の意味や場面の応用などの提示	練習活動： 穴埋め、聴解、話す、句作り、ディスカッション、ロールプレイ
	⑥練習機会の提供	1. 音声データを聞いたり、話したり練習 2. 文型の知識の理解及び応用練習	
	⑦フィードバック	教師は学習者への訂正 学習者自分の感想へ全体に共有	ディスカッション、アンケートなど
まとめ	⑧成果評価	練習活動を通して個人やグループの評価の行い	自己評価、グループ評価
	⑨保持と転移の高め	食事や飲み物に関する文化知識や実際の場面状況の提示	応用練習、文化知識、Q&A、ケーススタディー

このように「9 教授事象」の流れに沿って組織化された学習デザインによって、CA は学習目標や学習内容を理解し、日本語技能を身につけやすくなるだろう。また教師にとっては、事象の基準に沿って授業の流れ、学習者の学習効果などの観察をし、よりよい方向に調整することができると思われる。

しかし、実際の授業場面では、学習効果は学習者、教室、設備などの諸要素によって影響されるので、現状を把握し改善につなげるためにも、【Plan-Do-See】プロセスに従ってさらに検証することが必要である。

## 7. 終わりに

本稿はインストラクショナル・デザイン (ID)理論の視点から、台湾「C社」の『日本語の学習』を材料にしてCAのための日本語教科書の現状分析をした。教科書項目の構成は「ガニエの9教授事象」に照らすと、一部の事象に偏って配置されていることが認められた。「単語」「文型表現」などの項目は、一般の日本語教科書とは異なって、専門日本語教科書としての特徴を反映しているが、学習目標の明確化、単語、文型表現の段階的な学習や発話機能の提示などの点で改善すべき問題も明らかになった。

CAが限られた時間制限で日本語学習を進めるため、効果的・効率的・魅力的な授業デザインをどのように進めるか、実用性が高く、自律的に学ぶという意味での独学支援ができる教科書をどのように開発するのかなど多くの課題が残っている。さらに、より広い視点から見ると、台湾の大学教育における航空日本語科目と企業での日本語訓練コースとをどのようにつなげるか、という問題も議論を要するものである。今後、これらの課題を明らかにするために取り組みを続けたい。

**インストラクショナル・デザインの視点からの CA 日本語教科書分析**  
**—台湾 C 航空会社の日本語教科書を中心に—**

**参考文献**

- 赤城永理子（2011）「職業目的の日本語教育における学習内容の優先順位決定方法—フライトアテンダントとホテルスタッフを例に—」『日本語教育方法研究会誌』22号(3),4-5
- 稲垣志・鈴木克明（2011）『授業設計マニュアル教師のためのインストラクショナル・デザイン』北大路出版
- 大坪一夫（1991）「専門日本語教育研究の一方」『専門日本語教育研究』1号,2-3
- 加住有希子（2016）「日本語教科書研究の視座—日本語教科書研究フレームワーク作成への試案」『日本語教科書研究の視点 新しい教科書研究論の確立をめざして』くろしお出版
- 島田徳子・柴原智代（2008）『国債交流基金日本語教授法シリーズ 第14巻「教科書開発」』ひつじ書房出版
- 鈴木克明（2002）『教科書設計マニュアル 独学を支援するために』北大路書房出版
- 鈴木克明（2005）「e-Learning 実践のためのインストラクショナル・デザイン」『日本教育工学論文誌』29号(3),197-205
- 平山紫帆・高橋雅子（2013）「「生活日本語」の教科書分析：学習メカニズムの観点から」『日本語教育実践研究』1号,75-86
- 山岡政紀（2008）『発話機能論』くろしお出版, 47
- 張雅筑（2017）「空服員華語教科書編寫研究以免稅品銷售服務為例」『國立高雄師範大學華語文教學研究所碩士論文』
- 張玉佳（2017）「初級航空華語教科書編寫與教學應用研究」『國立暨南大學華語文教學碩士學位學程碩士論文』
- 崔永華（2012）『對外漢語教學設計導論』北京語言大學出版社, 216
- 羅永祥（2017）「キャビンアテンダントの日本語使用場面に関する一考察—台湾 C 航空会社を対象に—」『銘傳大學應用日語學系碩士論文』
- 羅永祥（2021）「航空日本語科目から見た学科カリキュラム現状調査—台湾の大学を中心に—」『かほよとり』17号,37-48
- 李蓓蓓（2005）「高职专门用途外语教科書建設分析」『成都师范学院学报』31号,55-58

**URL :**

リーデング・チュウ太 日本語読解学習支援システム

(<https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp/index.html>) (2021年07月24日)

日本語 NET <<https://nihongokyoshi-net.com/minnango-nihongo-lessonplans/>> (2021年07月24日)